慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義 : 五百周年に寄せて
Sub Title	Reconsidering the significance of prospective studies on the European reformation : celebration of the 500th anniversary of the reformation
Author	野々瀬, 浩司(Nonose, Koji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.1 (2018. 12) ,p.71(71)- 80(80)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2017年度三田史学会大会シンポジウム報告 : シンポジウム「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義 : 五百周年に寄せて」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20181200-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義――五百周年に寄せて――」

ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義

――五百周年に寄せて――

野々瀬　浩　司

二〇一七年六月二四日（土）に、慶應義塾大学三田キャンパス西校舎五一七教室において、「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義――五百周年に寄せて――」と題して、三田史学会大会総合部会シンポジウムが開催され、三つの講演とそれに関連した活発な質疑応答が行われた。講演者とその題目は、①日本女子大学名誉教授の森田安一氏「ルター肖像画の変遷とルター改革の動向」、②東京大学大学院総合文化研究科の西川杉子氏「ルターを引き継いで―一七・一八世紀プロテスタントたちの連携運動―」、③慶應義塾大学法学部の田上雅徳氏「教会を持続させた宗教改革 ―政治思想史的考察―」という内容で構成されていた。(1) いずれの報告も学術的に非常に豊かな内容を含んでいたため、本シンポジウムに対して、後日各所から肯定的な意見が寄せられた。当初は、聖学院大学人文学部の和田光司氏にコメントを依頼していたが、一身上の都合により、急遽、司会担当の野々瀬浩司がそれを代行することとなった。本シンポジウムの趣旨として、以下のようなものを提示した。

マルティン・ルターが、一五一七年一〇月三一日に「九五箇条の提題」で教会の改革を訴えてから、二〇一七年で丁度五百年が経過したことになる。これまでマックス・ヴェーバーやエルンスト・トレルチをはじめとした多くの研究者が、ヨーロッパ史あるいは世界史における宗教改革の役割や意義について、宗教、思想、政治、経済、社会、文化などの多方面の視点から言及してきた。日本でも戦後大塚史学を中心に、近代的合理主義の成立

との関連で宗教改革の歴史的意義に関する活発な議論が展開された。[2] しかしながら、近代化の意味や役割に対して様々な角度から問題提起がなされている現在において、宗教改革研究自体が大きな岐路を迎えている。ここで宗教改革に関する主要な学説の一部を、本シンポジウムに関連したものを中心にごく簡単に紹介したい。

東西冷戦期には、ドイツ民主共和国やソビエト連邦のマルクス主義的な研究者たちは、宗教改革と農民戦争を併せて未成熟に終わった「初期市民革命」と規定した。彼らは、領邦国家化の進展による政治的分裂状態が生産力の発展を抑止し、資本主義的生産関係と封建的政治体制との矛盾・対立が顕在化したと見なした。そのような「初期市民革命説」に対して、西ドイツの非マルクス主義的な研究者から、経済的利害関係とそれに依拠した階級対立を過度に強調したという批判が向けられた。[3]

一九六〇年代以降に、民衆の視点から考察する社会史な方法が宗教改革研究に取り入れられ、そこではまず共同体の構造分析との関連で中心的に議論され始めた。宗教改革思想と都市共同体を結びつけて議論したベルント・メラーの研究は、社会史的な研究として先駆的意味をもち、今日でも基礎的な研究文献としてしばしば参照されている。[4] 彼によれば、宗教改革は自治権を保持していた帝国都市において、共同体を基盤にして帝国の他の諸身分よりもずっと強度に受け入れられたというのである。メラーの議論を農村共同体に拡大したペーター・ブリックレは、共同体を基盤とした運動という共通の尺度で、宗教改革とドイツ農民戦争を総合的にその社会構造から考察し、「共同体宗教改革論」を展開した。[5] さらに、宗教改革の思想がどのような形で普及したのかについて分析した研究が現れ、そのコミュニケーションプロセスが明らかにされ、宗教改革期における木版画などの視覚的表現を用いたプロパガンダ合戦としての側面が巧みに描かれた。[6]

その後、一五一七年〜一五五五年の時期を中心に考察していたスタンダードな宗教改革史研究に対して疑問が投げかけられ、「アウクスブルク宗教平和」の成立以降の時期の学術的意義にも着目された。ツェーデンが「宗派化」に関する先駆的研究を行い、それを受けてハインツ・シリングは、一六世紀後半における領邦国家と宗教改革との結びつきを、「宗派化」として包括的に規定した。さらにシリングは、ゲルハルト・エストライヒによって提唱された「社会的規律化」という概念を用いて、

「宗派化」をその前段階ないしは触媒と見なした。しかし「宗派化」に関しては、地域的な多様性などが指摘され、反論も提起されている。[7] 社会構造史的な分析が進展すると、一五一七年の出来事やルター個人の役割が相対化され、より長期的な視点で宗教改革が考察され始めた。つまり、中世末から一七・一八世紀にも継続されたプロテスタント化としての「長期の宗教改革」という議論が展開されたのである。これによって、宗教改革はいつから始まり、いつまで続いたのかという問題提起が重要な位置を占めるようになった。[8]

このような膨大な研究蓄積がある中で、[9] 五百周年という節目の時期に過去をふり返りながら、今日さらに宗教改革研究を継続することには、どのような意義があるのか、あるいは、さらに学術的に意味のある研究方法としては、どのようなものが残されているのかについて改めて議論したいと考える。本シンポジウムでは、まずドイツ語圏、英語圏、フランス語圏における宗教改革研究に従事している三人の専門家から問題提起を行ってもらい、次にそれを受けて、多角的な視点からの議論に基づいた学術交流を行うことによって、近世という時代の特質の一端を明らかにしたい。

以上のような趣旨のもとに三つの講演が行われたが、ここではその内容に関する詳細な説明については省略し、それぞれの報告に対して、どのような議論が展開されたのかについて簡潔に記すことにする。

森田報告は、文字史料以外の視覚的な題材を用いた多角的な視点から宗教改革研究を行い、絵画などの図像を考察対象とする美術史研究と、主に文字で記された史料の分析に依拠してきた歴史研究との間の相互交流を促進するための可能性を広く開いたと評価できる。この報告に対して、まずコメンテーターから、「ルター肖像画の変遷の背後に、ルター自身の意志はどの程度反映していたのか、さらには絵画の作成過程の中で、画家の意志とルターの意志との間に緊張や対立はなかったのか」という質問が提起されたが、森田氏からは「恐らくルター自身の意向とは関係なく肖像画が描かれた」という返答がなされた。さらにコメンテーターから、木版画などによる視覚的なプロパガンダに触れた人々の内面を解明し、個々の木版画が具体的にどのような社会的影響を与えたのかに関する分析をより厳密に行うためには、何が必要か、特に民衆の側の史料が少ないので、プロパガンダを受け取った人々の心の変化をどのように実証できるのか

という問いが発せられたが、森田氏は、それを厳密な意味で解明することは非常に困難であるという見解を示した。その他にコメンテーターは、「確かにより複眼的な視点から人間を全体として把握するためには、文字史料以外の史料を利用することが大切であることは間違いないが、しかしながら、絵画を史料として取り扱う際には、その曖昧でアンビバレントな描写から、しばしば研究者が独善的で偏った解釈を生み出してしまう危険性が生じるのではないか」という問題提起を行い、それを回避するための史料批判としての方法には、どのようなものがあるのかという質問を行った。それに対して、森田氏は文字史料においても解釈の多様性を許すようなものが少なからず存在するので、そのような困難さは、画像などを史料として使用する場合に限定されるわけではなく、すべての史料に共通の問題であるという考えを明らかにした。

西川報告は、より長期的な視点から、さらには国際的なネットワークの視点から、幅広く宗教改革運動を考察し、プロテスタントの諸宗派における連携運動の実態を解明したことにおいて、重要な学術的意味を有している。西川報告に対して、まずコメンテーターから、「プロテスタントの連携は、どのような宗派の間で可能であったのか、どのような基準で連携の対象から除外され、あるいはその中に含まれたのか」という質問がなされた。さらに、「例えば再洗礼派、アルミニウス派、敬虔主義などはどのような扱いを受けたのか、そこにはプロテスタント内部での寛容と不寛容の問題はなかったのか」という問いが提出された。それに対して西川氏は、連携の対象は体制教会中心であり、特に三位一体論を認めない分派がそこから排除されたことを指摘した。次に、「プロテスタントの全般的危機の時代の中で、ＳＰＣＫなどの連携運動やネットワーク活動は、どのような効果をもたらしたのか、あるいは限界をもっていたのか、またプロテスタント版布教聖省は、カトリックの類似の組織と比較して、どのような共通点と相違点があったのか」というコメントが提出された。それに対して西川氏から、カトリックのものと比較すれば、プロテスタントのネットワーク活動は、組織力や財政基盤という点で力不足であったことは否定できないが、個々の状況に応じた成果を収めたことが明らかにされた。さらに「ＳＰＣＫ以外に、類似のネットワーク活動を行った他団体はなかったのか」というコメンテーターの質問に対して、西川氏は植

民地を中心に活動していたＳＰＧやスイスのネットワーク活動の存在などを指摘した。最後にコメンテーターから、「エルンスト・トレルチは、啓蒙思想の影響などの観点からプロテスタントを、保守的な「古プロテスタンティズム」と、理性の時代におけるより自由な「新プロテスタンティズム」とに分けたが[10]、そのような区別は、ＳＰＣＫの連携運動あるいは長期の宗教改革を理解する上で、どのような有効性をもっているのか、あるいはもっていないのか」という大きな問題提起がなされた。この問題に対して西川氏は、啓蒙思想をどのようにとらえるのかによって見方が非常に異なるものの、一六世紀と啓蒙期との間にある宗教改革運動の連続面に注目する意義を指摘した。

田上報告は、一六世紀にはまだ個人意識が十分には成立していなかったことを指摘した上で、聖餐式を中心とする宗教儀礼や教会制度の役割を重視する精神的態度を強調して、政治思想史の観点から中世カトリック教会とルターやカルヴァンなどのプロテスタント運動との間にある類似性や連続面に着目したことにおいて、学術的に重要な意義を有している。田上報告に対してまずコメンテーターから、「一六世紀を「長い中世」の最後と位置づけ、一六世紀と一七世紀の断絶面を強調したことの利点と欠点は何か」という質問が提起された。さらに、「そのような時代区分には、一六世紀と一七・一八世紀の連続面を強調する西川報告のものとは、根本的な見解の相違があり、政治思想においては、中世と宗教改革との間の断絶面は、それほど大きくないのか」という質問が提起された。この問題は、「中世とは何か」「近代とは何か」という重大な議論に発展するものと思われる。それに対して田上氏は、ユグノー戦争期のボダンによる主権概念成立の意義やホッブズの政治思想の近代性を強調し、ルターやカルヴァンの政治思想との間にある相違点を提示した。次にコメンテーターから、「洗礼や聖餐などのサクラメントが、実際にどのような形で政治思想に影響を与えたのか」という議論が展開された。つまり、政治には儀礼的なものが多く伴われることは間違いないが、宗教的儀礼と政治思想との間の影響関係は、より具体的には何に、どのようにしてあらわれるのか、例えば、もし国王や諸侯の戴冠式のやり方においてその痕跡が認められた場合には、非常に明瞭に両者の関係が実証できると考えられるのではないかという指摘がなされた。この問題に対して田上氏は、政治思想史家と歴史研究者と

の間の研究方法の違いを認め、今後検証する意向を表明した。最後にコメンテーターから、「政治思想史研究と歴史研究の間の活発な学術交流によって、宗教改革の実態をより豊かに総合的に描き出すためには、どのような方法があるのか、あるいは、その可能性はないのか」という宗教改革研究の学際化に関わる問題提起がなされた。それに対して田上氏は、総論において両者の学術的交流の可能性や意義を肯定した上で、大きな物語を叙述する政治思想史と細かい事実を実証的に積み重ねる歴史学の間には、相互的な学問の自律性を尊重しあうことの大切さも強調した。なおこの問題の重要性については、後日早稲田大学名誉教授の小倉欣一氏からも指摘された。

その他に、質問用紙に記載された複数の問題提起が紹介され、それに基づいて質疑応答がなされたが、本シンポジウム全体に関わるもののみをここに記したい。一二・一三世紀の教会史を専門とする神崎忠昭氏から、「キリスト教が人間的な価値だけではなく、物質的世界の秩序を支配していた中世ヨーロッパとは異なり、一七・一八世紀にはキリスト教がより人間的なものに重心を移したように見えるが、そのような理解で正しいのか」という問いが提出された。これに対して、講演者を代表して田上氏から、「それはおおむね認められるのではないか」という返答がなされた。

今回のシンポジウムは、近世ヨーロッパ史研究者に限らず、多分野の歴史研究者や考古学者からも多くの肯定的な反響を得た。その理由としては、宗教改革史研究が抱える諸課題が、今日の歴史学全体にかかわる問題にも繋がる可能性をもっていたことが想定できる。戦後、歴史研究の中で社会史的な視点の重要性が著しく増加したことによって、宗教、政治、経済、社会、文化などの個別の分野からの分析を行うだけではなく、より多角的視点から総合的に考察する必要性が求められ、学際的な研究交流の役割が強調され、全体史の中で過去の出来事の実像を再構築する傾向が高まった。そのことは、学術的な前進を着実にもたらしたものの、歴史研究自体の大幅な多様化や相対化を創出し、進むべき進路を不透明なものにしてしまうような負の側面を生み出したとも表現できる。今後とも三田史学会大会総合部会シンポジウムが、具体的な題材を通して、史学系の学問の抱える個別の課題を提示しながら、相互的な学術交流のために積極的な役割を果たすことができる機会となることを切望する。

※本稿は、平成二九年度 基盤研究（C）「宗教改革期スイスにおける都市共同体の構造に関する社会史的研究」（課題番号17K03188）による研究成果の一部である。

註

（1） 講演者の略歴と主な業績を簡単に記す。

森田安一【もりた　やすかず】 一九四〇年、東京都に生まれる。東京大学文学部西洋史学科卒業、同大学院人文科学研究科博士課程中退、博士（文学、東京大学）。東京学芸大学教授を経て、日本女子大学教授、同名誉教授。スイス史、宗教改革史を専門とする。著書・論文として以下のものなどがある。『スイス中世都市史研究』（山川出版社、一九九一年）。『スイス ―歴史から現代へ―』（刀水書房、一九八〇年）。『物語 スイスの歴史 ―知恵ある孤高の小国―』（中央公論新社、二〇〇〇年）。『図説 宗教改革』（河出書房新社、二〇一〇年）。『「ハイジ」の生まれた世界 ―ヨハンナ・シュピーリと近代スイス―』（教文館、二〇一七年）。編著『スイスの歴史と文化』（刀水書房、一九九八年）。編著『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』（教文館、二〇〇九年）。「チューリヒにおける再洗礼派運動について」（『史学雑誌』第七六編第一一号、一九六七年、一～四〇頁）。「『神の義』と『人間の義』―ツヴィングリの権力・社会観―」（『思想』第六四六号、一九七八年、八一～一〇一頁）; Zürich und die Reichsstädte, in: Heiko Obermann/ E. Saxer/ A. Schindler/ H. Stucki（Hgg.）, *Reformiertes Erbe. Festschrift für Gottfried W. Locher zu seinem 80. Geburtstag* Bd.1. Zürich 1992.

西川杉子【にしかわ　すぎこ】 一九六三年、東京都に生まれる。立教大学文学部卒業。ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ大学院修了（Ph.D. 取得）。神戸大学助教授を経て、現在、東京大学大学院総合文化研究科地域研究専攻准教授。近世プロテスタント・ネットワーク研究。著書・論文として以下のものなどがある。『ヴァルド派の谷へ ―近代ヨーロッパを生きぬいた異端者たち―』（山川出版社、二〇〇三年）。「イングランド国教会はカトリックである ―一七・一八世紀のプロテスタント・インターナショナルと寛容問題―」（深沢克己・高山博編『信仰と他者』東京大学出版会、二〇〇六年）。「プロテスタント国際主義を生きる ―J・C・ヴェンドリの遍歴一六五六～一七二四年―」（近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、二〇〇八年）。訳書『オックスフォード・ブリテン諸島の歴史 七 一七世紀』（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）; "Henry Compton, Bishop of London（1676-1713）and Foreign Protestants", in: *From Strangers to Citizens*, Brighton 2001; "Ending a Religious Cold War: Confessional Trans-state Networks and the Peace of Utrecht", in: Inken Schmidt-Voges/ Ana Crespo Solana（eds.）, *New Worlds? Transformations in the Culture of International Relations Around the Peace of Utrecht*, London/ New York 2017, pp. 113-127.

田上雅徳【たのうえ　まさなる】　一九六三年、徳島市に生まれる。一九八六年慶應義塾大学法学部政治学科卒業、慶應義塾大学法学研究科博士課程単位取得退学、博士（法学、慶應義塾大学）。現在、慶應義塾大学法学部教授。カルヴァンを中心とした近世ヨーロッパ政治思想史や政治神学の研究。著書・論文として以下のものなどがある。『初期カルヴァンの政治思想』（新教出版社、一九九九年）。『入門講義キリスト教と政治』（慶應義塾大学出版会、二〇一五年）。「ルターとカルヴァン　―近代初期における身体性の政治神学―」（『岩波講座　政治哲学　一』岩波書店、二〇一四年、二九～五〇頁）。「カルヴァン・『終末論』・政治」（『改革派神学』三二、二〇〇五年、四五～六三頁）。「カルヴァンの『契約論』、その政治思想的含意」（『法学研究』七六（一二）、二〇〇三年、八一～一一〇頁）。「カルヴァンの為政者観」（『法学研究』八四（二）、二〇一一年、三〇七～三三五頁）。「一六世紀国家と西欧精神史」（『法学政治学論究』三二、一九九七年、一六五～一九九頁）。「カルヴァン政治思想研究序説　―その内在的理解に向けて―」（『法学政治学論究』三一、一九九六年、三一九～三五〇頁）。「逢坂元吉郎、未完の政治神学」（『途上』二八、二〇一三年、九九～一一八頁）。

（2）　M・ヴェーバー著／大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店、一九八九年）。E・トレルチ著／内田芳明訳『ルネサンスと宗教改革』（岩波書店、一九五九年）。大塚久雄『宗教改革と近代社会』（みすず書房、一九六四年）。

（3）　Gerhard Brendler (Hg.), *Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland. Referat und Diskussion zum Thema Probleme der frühbürgerlichen Revolution in Deutschland 1476-1535* (Tagung der Sektion Mediävistik der Deutschen Historiker-Gesellschaft vom 21.–23. 1. 1960 in Wernigerode, herausgegeben von Ernst Werner und Max Steinmetz, Bd. 2), Akademie-Verlag Berlin 1961; Max Steinmetz (Hg.), *Die frühbürgerliche Revolution in Deutschland* (*Studienbibliothek DDR- Geschichtswissenschaft* Bd. 5), Akademie-Verlag Berlin 1985; 寺尾誠「東独における宗教改革と農民戦争の研究の現状」（『三田学会雑誌』五五・四、一九六二年、九一～一〇二頁）。田中真造「初期市民革命としての宗教改革とドイツ農民戦争」（『思想』第五九一号、一九七三年、一四九～一六二頁）。

（4）　Bernd Moeller, *Reichsstadt und Reformation*, Neue Ausgabe, mit einer Einleitung, herausgegeben von Thomas Kaufmann, Mohr Siebeck Tübingen 2011［森田安一・棟居洋・石引正志訳『帝国都市と宗教改革』（教文館、一九九〇年）］; Bernd Moeller, Stadt und Buch. Bemerkungen zur Struktur der reformatorischen Bewegung in Deutschland, in: Wolfgang J. Mommsen/ Robert W. Scribner (Hgg.), *Stadtbürgertum und Adel in der Reformation: Studien zur Sozialgeschichte der Reformation in England und Deutschland* (*Veröffentlichungen des Deutschen Historischen Instituts London* 5), Stutt-

gart 1979, S. 25–39; Bernd Moeller, Luther und Städte, in: *Aus der Lutherforschung. Drei Vorträge*, Westdeutscher Verlag: Opladen 1983, S. 9–26; 中村賢二郎・倉塚平編著『宗教改革と都市』（刀水書房、一九八三年）。棟居洋『ドイツ都市宗教改革の比較史的考察―リューベックとハンブルクを中心にして―』（ICU比較文化叢書一、国際基督教大学比較文化研究会、一九九二年）。渡邊伸『宗教改革と社会』（京都大学学術出版会、二〇〇一年）。野々瀬浩司「宗教改革と都市共同体」（『思想』第一二二号、二〇一七年一〇月、二四～四五頁）。

（5） Peter Blickle, *Gemeindereformation. Die Menschen des 16. Jahrhunderts auf dem Weg zum Heil*, München 1985; ders., *Kommunalismus: Skizzen einer gesellschaftlichen Organisationsform* 2 Bde., (Band 1: Oberdeutschland, Band 2: Europa), München 2000; ders., *Deutsche Untertanen. Ein Widerspruch*, München 1981［服部良久訳『ドイツの臣民』（ミネルヴァ書房、一九九〇年）］; Peter Blickle, *Die Reformation im Reich*, 2. überarbeitete und erweiterte Auflage, Stuttgart 1991［田中真造・増本浩子訳『ドイツの宗教改革』（教文館、一九九一年）］; Peter Blickle, *Die Revolution von 1525*, 3. erweiterte Auflage, München/ Wien 1993［前間良爾・田中真造訳『一五二五年の革命』（刀水書房、一九八八年）］; 前間良爾『ドイツ農民戦争史研究』（九州大学出版会、一九九八年）。野々瀬浩司『宗教改革と農民制―スイスと西南ドイツの人格的支配―』（慶応義塾大学出版会、二〇一三年）。

（6） Robert W. Scribner, *For the Sake of Simple Folk. Popular Propaganda for the German Reformation* (*Cambridge Studies in Oral and Literate Culture* 2), Cambridge 1981; 森田安一『ルターの首引き猫―木版画で読む宗教改革―』（山川出版社、一九九三年）。同『木版画を読む―占星術・「死の舞踏」そして宗教改革―』（山川出版社、二〇一三年）。蝶野立彦『一六世紀ドイツにおける宗教紛争と言論統制』（彩流社、二〇一四年）。

（7） E. W. Zeeden, Grundlagen und Wege der Kofessionsbildung in Deutschland im Zeitalter der Glaubenskämpfe, in: *Historische Zeitschrift* 185 (1958), S. 249–299; Gerhard Oestreich, Strukturprobleme des europäischen Absolutismus, in: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 55 (1968), S. 329–347［邦訳：F・ハルトゥング他『伝統社会と近代国家』（岩波書店、一九八三年）に所収］; Heinz Schlling, Konfessionalisierung im Reich. Religiöser und gesellschaftlicher Wandel in Deutschland zwischen 1555 und 1620, in: *Historische Zeitschrift* 246 (1988), S. 1–45; Wolfgang Reinhard, “Pressures Towards Confessionalization? Prolegomena to a Theory of the Confessional Age,” in: C. Scott Dixon (ed.), *The German Reformation*, Oxford: Blackwell 1999, pp. 172–192; 踊共二『改宗と亡命の社会史』（創文社、二〇〇三年）。

（8） Peter G. Wallace, *The Long European Reformation.*

Religion, Political Conflict, and the Search for Conformity, 1350-1750, Second Edition, Palgrave Macmillan: Houndmills, Bastinstoke, Hampshire 2012; Jeffrey R. Watt (ed.), *The Long Reformation* (*Problems in European Civilization*), Boston/ New York 2006; 西川杉子「長期の宗教改革運動 ―一七・一八世紀の展開―」(森田編、前掲『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』、九一～一〇六頁)。

(9) 宗教改革に関する研究史を紹介した論文や研究書の一部を提示する。Bernd Moeller, Probleme der Reformationsgeschichtsforschung, in: *Zeitschrift für Kirchengeschichte* 76 (1965), S. 246-257; Hans-Christoph Rublack, Forschungsbericht Stadt und Reformation, in: Bernd Moeller (Hg.), *Stadt und Kirche im 16. Jahrhundert* (*Schriften des Vereins für Reformationsgeschichte* Bd.190), Gütersloh 1978, S. 9-26; Heribert Smolinsky, Stadt und Reformation. Neue Aspekte der reformationsgeschichtlichen Forschung, in: *Trierer Theologische Zeitschrift* 92 (1983), S. 32-44; Kaspar von Greyerz, Stadt und Reformation: Stadt und Aufgaben, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 76 (1985), S. 6-63; Rosemary O'Day, *The Debate on the English Reformation*, Second Edition, Manchester/ New York 2014; Thomas Kaufmann, Die deutsche Reformationsforschung seit dem Zweiten Weltkrieg, in: *Archiv für Reformationsgeschichte* 100 (2009), S. 15-47; Olaf Mörke, *Die Reformation. Voraussetzungen und Durchsetzung* (*Enzyklopädie Deutscher Geschichte* 74) Berlin/ Boston 2017; 山本信太郎「イングランド宗教改革史研究をめぐって ―『ヒストリカル・リサーチ』A・G・ディケンズ特集号に寄せて―」(『西洋史学』第二二四号、二〇〇六年、三九～五二頁)。ケネス・G・アッポルド著/井上周平訳「宗教改革のグローバルな理解にむけて」(『史苑』第七六巻第一号、二〇一五年、一三七～一五一頁)。

(10) Vgl. 芳賀力・河島幸夫訳『トレルチ著作集九　プロテスタンティズムと近代世界Ⅱ』(ヨルダン社、一九八五年)。